

■ 予断を許さない状況ながらドルの上値は自ずと限られる！？

なおも、イラン情勢に関わる諸々の情報に国際金融市場は振り回され続けている。イランがホルムズ海峡に機雷をばら撒いたと言え、ほどなく「米軍はイランの機雷敷設船をほぼすべて破壊した」と伝わるなど、その内容は刻一刻と変化しており、戦争状態の終結に向けてネガティブなものやポジティブなものも始終入れ替わりで飛び込んでくるからたまらない。そのたびに、市場はリスクオフとリスクオンを何度も切り替えさせられている。

今週9日のNY時間以降は、主要7カ国（G7）財務相が石油備蓄の協調放出について協議すると伝わり、NY原油先物価格が一時1バレル＝80ドル台前半の水準まで値下がりした。そのことが一時的にも市場で過度に広がっていたリスクオフムードを和らげることに貢献しているものの、依然として予断を許さない状況であることは確かである。

トランプ米大統領は9日以降、繰り返し「イラン戦争はほぼ完全に終結している」などと述べているが、市場はそれを額面通りに受け取ることもできず、目下はトランプ発言の内容の信ぴょう性を段階的にも確かめる時間帯にあると言える。

今秋に米国で行われる中間選挙を睨み、トランプ氏が原油価格の高騰と高止まりが続く状況を何があっても回避したい意向であることは誰の目にも明らかで、ゆえに原油価格上昇に歯止めをかけるようなトランプ氏の発言に対して市場は疑心暗鬼になるし、対抗してイラン側が「200ドルまで引き上げてやる」などと叫ぼうものなら、途端に不安心理が全体に広がったりもする。

昨日（11日）は、国際エネルギー機関（IEA）が過去最大となる4億バレルの石油備蓄放出で加盟国が合意したと発表したが、すでに石油備蓄の放出については市場で織り込み済みとなっていたうえ、ホルムズ海峡が事実上閉鎖されている状態はなおも続いていることから、足元では再び原油先物価格が強含みとなってきている。その結果、本日（12日）の東京時間はあらためて株安と円安の傾向が強まっており、ドル/円は再び159円台に乗せる動きとなっている。

前回更新分の本欄では、ドル/円について「当面はダブルボトムのネックラインをクリアに上抜けるかどうかを見定めることが重要」と述べた。



左図に見る通り、しばらくの間はネックライン付近でもみ合う動きを見せていたが、今週に入って同ラインをクリアに上抜ける動きとなってきていることは見逃せない。

目的に1月14日高値＝159.45円を強く意識した動きとなることは避けられないが、ここまでくると、もはや24年7月以来の160円台を試すなどと言っても無理なのではないか。

もちろん、トランプ氏の言う「イランの無人機とミサイル能力は完全に破壊されつつある」といった状況が近く現実のものとなる可能性もゼロではない。仮にそうなれば原油価格高とドル高の流れは一気に逆転するだろうから、ここからドル/円の一段の上値を追うことにはやはり慎重でありたいと個人的には考える。

その意味では、ユーロ/ドルについても今後の一段の下値余地は自ずと限られるのではないかと。すでに1.150ドル割れ寸前というところまで値を下げた場面が垣間見られており、そろそろ調整十分との感もないではない。

目下の状況にあって、自国でエネルギーを賄える米国のドルに対して輸入に頼る欧州経済圏のユーロが劣勢に立たされるのは当然のことである。とはいえ、少し長い目で考えて今回の戦争がドルにもたらすダメージは計り知れない。そもそも、米政府は日々膨大な戦費を投入し続けており、そうでなくとも膨らみ続けていた財政赤字の問題を一層悪化させるに違いない。先に明らかにされた2月の米雇用統計の結果はかなり深刻なものであったし、そのうえで秋の中間選挙に一波乱あるならば、いつまでもドルを持ち続けることも少々躊躇われる。